高等学校における基礎的汎用的能力の育成に関する研究
―総合学科Ａ高校の探求型学習の授業実践分析を通して―

The study of fostering basic and generic skills in senior high school：
Through the analysis of inquiry-based learning practices in one of
comprehensive senior high schools

長谷川　宏

HASEGAWA, Hiroshi

武庫川女子大学　学校教育センター紀要

第６号　2021 年

【研究報告】

高等学校における基礎的汎用的能力の育成に関する研究
―総合学科Ａ高校の探求型学習の授業実践分析を通して―

The study of fostering basic and generic skills in senior high school：
Through the analysis of inquiry-based learning practices in one of comprehensive senior high schools

長谷川　宏*

HASEGAWA, Hiroshi*

要旨

本研究では，新学習指導要領の中で，「総合的な学習の時間」が「総合的な探求の時間」となり，普通科教育に不足している探求型学習の重要性が増していると考え，総合学科がこれまで取り組んできた探究型学習に注目した。探求型学習が，社会で必要とされる力である基礎的汎用的能力を育んでいるのか，また，卒業後も探求型学習で学んだことが本当に活かされているのかを明らかにする必要があると考えた。そこで，総合学科Ａ高校の探究型学習の授業実践を通して，探求型学習が基礎的汎用的能力の育成にどの程度影響を及ぼしているかを調べるために，３年次生への質問紙調査や卒業生へのインタビュー調査を行った。３年次生質問紙調査から探求型学習が基礎的汎用的能力の育成に繋がっていることが明らかになり，また卒業生インタビュー調査からは，探求型学習が高校卒業後も職場での仕事や大学での学業において役立ち，基礎的汎用的能力が活かされていることも明らかになった。探求型学習の重要性が確認されたことで，本研究が今後導入される「総合的な探求の時間」へのヒントとなり，普通科高校改革へ繋がっていって欲しいと願う。

キーワード：基礎的汎用的能力　　探求型学習　　課題研究　　高等学校　　総合学科

１．　はじめに

総合学科は，「高等学校教育の改革の推進について(第四次報告)」(1993)を受け，普通科と専門学科の双方の課題を解消し，それぞれの長所を取り入れた「第３の学科」として 1994 年に創設され，これまで「産業社会と人間」⑴や「課題研究」⑴等の探求型学習を取り入れた教育を推進させてきた。

また，中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」（1999）において，「キャリア教育」という用語が初めて用いられ，平成 21（2009）年 3 月告示の高等学校学習指導要領において「キャリア教育」という文言が明記されることとなった。そして，中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（2011）において，総合学科を導入したことによる成果について，「キャリア教育を組織的・計画的に推進することができている」⑵と指摘し，また，キャリア教育の中心として「基礎的汎用的能力」の育成が提示された⑶。「基礎的汎用的能力」は，「一人一人の社会的・職業的自立に向け，必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して，キャリア発達を促す基盤となる能力」と定義されている。また，令和４年から年次進行で実施される新高等学校学習指導要領では教育改革の一つとして，「総合的な学習の時間」が「総合的な探求の時間」として生まれ変わることとなり，総合学科の成果が上手く取り入れられている。

そこで本研究では，総合学科が長年取り組んできた探求型学習と基礎的汎用的能力の育成との関連性及び高校卒業後の基礎的汎用的能力の影響に注目した。そして，総合学科Ａ高校の協力を得て本研

＊ 入試センター・入試センター長代理

究を行った。

２．　総合学科Ａ高校での授業実践

2.1　Ａ高校について

都市部にあるＡ高校は，クラス数は各年次７クラス規模で，男女の割合は，男子４割，女子６割で，学力的には主に中学校の中間層が入学してくる学校である。卒業後の進路は，就職が約１割，専門学校が約２割，国公立を含め大学短大が約７割といった上級学校への進学を主としている。

2.2　Ａ高校の探求型学習の主な取組

①　総合的な学習の時間（２年次）

［１学期］ディベート学習

・ディベートの準備として，論理的な考え方，ディベートのルール，根拠を持った立論，相手の意見への反論についてそれぞれ講義を受け，ディベートについて学ぶ。

・ディベートについて学んだあと，実際に練習試合を経験した上で，クラス代表を選び，トーナメント方式で決勝戦まで行い，優勝チームを選ぶ。

［２・３学期］プレ課題研究

・３年次で行う課題研究の準備段階として，プレ課題研究を実施している。生徒の興味関心，進路希望に応じて，次の９コースを設定している。

㋐教育芸術探求，㋑保育探求，㋒時事問題探求，㋓国際文化探求，㋔看護探求，㋕医療・福祉・スポーツ探求，㋖生活文化探求，㋗自然科学探求，㋘社会科学探求

・上記の９つをゼミ形式で行い，研究テーマの立て方，調査方法の検討と実践，レポートへのまとめ方，プレゼンテーションの作成・改善等，研究に必要な過程を体験しながら学ぶ。文献やインターネット等で調査しながら自分のテーマを設定し，仮説を立てていく。

②　課題研究（３年次）

・２年次で行ったプレ課題研究を引き続き行い，生徒一人一人がグループではなく個人でゼミ毎に調査研究をしていく。７月末には，6,000 字の論文を完成させ提出し，２学期から各自がパワーポイントでの研究発表に向けて準備をする。11 月には，ゼミ内発表会を行い，その代表者が年次全体で発表し，最終的に年次の代表者が校内総合学科発表会で発表する。

３．　基礎的汎用的能力

基礎的汎用的能力についての定義を確認する。基礎的汎用的能力については，「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（答申）[3]において述べられており，次のように表１に整理した。

表１　基礎的汎用的能力について

人間関係形成・社会形成能力	多様な他者の考えや立場を理解し，相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができるとともに，自分の置かれている状況を受け止め，役割を果たしつつ他者と協力。協働して社会に参画し，今後の社会を積極的に形成することができる力	具体的な例	他者の個性を理解する力，他者に働きかける力，コミュニケーション・スキル，チームワーク，リーダーシップ等
自己理解・自己管理能力	自分が「できること」「意義を感じること」「したいこと」について，社会との相互関係を保ちつつ，今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に，自らの思考や感情を律し，かつ，今後の成長のために進んで学ぼうとする力	具体的な例	自己の役割の理解，前向きに考える力，自己の動機付け，忍耐力，ストレスマネジメント，主体的行動等
課題対応能力	仕事をする上での様々な課題を発見・分析し，適切な計画を立ててその課題を処理し，解決することができる力	具体的な例	情報の理解・選択・処理等，本質の理解，原因の追究，課題発券，計画立案，実行力，評価・改善等
キャリアプランニング能力	「働くこと」の意義を理解し，自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け，多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら，自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力	具体的な例	学ぶこと，・働くことの意義や役割の理解，多様性の理解，将来設計，選択，行動と改善等

４．　Ａ高校で学んだ生徒への質問紙調査

4.1　研究の目的

本研究では，様々な探求型学習の中から，A 高校で探求活動の中心とみなす課題研究（プレ課題研究を含む）の授業に絞って ⑷次のことを検証する目的で調査分析を行った。

・高校在学中，課題研究が生徒に対して基礎的汎用的能力の４つの能力を育んでいるか。

4.2　対象者と調査時期

本研究では，A 高校 3 年次生（計 265 名）を対象とし，当日欠席等の理由で参加できなかった生徒を除く 235 名から回答が得られた。調査結果は，個人が特定されない形で公表し，成績にも関係ないこと及び本研究以外の利用はしない旨を説明し調査を実施した。調査項目については、本研究の調査項目（4.5 で示した質問項目）以外に A 高校が実施した項目も含まれている。調査時期は，2019 年 1 月 15 日の LHR である。

4.3　調査手続き

LHR の時間に各クラスの担任が質問紙を配布し終了後にその場で回収した。

4.4　調査方法

４件法による質問紙とした。

4.5　調査内容

本研究の目的に使用する質問項目を以下の通り提示する。そして基礎的汎用的能力である，次の４つの能力，ア)「人間関係形成・社会形成能力」，イ)「自己理解・自己管理能力」，ウ)「課題対応能力」，エ)「キャリアプランニング能力」の分析を行うため，設定した調査質問項目を統合し，信頼性分析を行った。

ア）　「人間関係形成・社会形成能力」

質問 11　相手の気持ちや立場を考えて話ができる
質問 12　自分と異なる意見でも受け止めることができる
質問 14　人と何か作業する際に，一緒に協力することができる
質問 21　グループワークやディスカッションで自分の意見を言うことができる
質問 22　人前で発表することができる

以上の質問項目５つを設定し，信頼性分析を行った結果，内的整合性を表す α 係数は 0.581 となり，これらの５つの質問項目の統合には十分耐え得ることができないと判断された。そこで，「人間関係形成・社会形成能力」を人と協調したり，協力する力，即ち，協調・協力能力と自ら積極的に外部へと発信していく積極的発信能力の２種類に分けた。そして質問 11，12，14 を「人間関係形成・社会形成能力」（協調・協力能力）として，また，質問 21，22 を「人間関係形成・社会形成能力」（積極的発信能力）として信頼性分析を行った結果，α 係数は それぞれ 0.700，0.810 となり，それぞれが統合に十分耐え得ると判断された。よって，「人間関係形成・社会形成能力」（協調・協力能力）と「人間関係形成・社会形成能力」（積極的発信能力）という尺度で分析する。

イ）　「自己理解・自己管理能力」

質問 16　自分の性格を把握できる
質問 17　辛いことでも我慢できる
質問 23　自分が納得するまで，様々な方法を使ってとことん調べることができる
質問 24　物事を深く考えることができる
質問 25　進んで物事に取り組むことができる

同様に，「自己理解・自己管理能力」を測るため，上記の５つの質問項目の信頼性分析を行った結果，「人間関係形成・社会形成能力」の α 係数は 0.749 であり，５つの質問項目の統合に十分耐え得ると判断された。

ウ）　「課題対応能力」

質問 19　知らないことでも，自分から進んで調べることができる
質問 20　計画を立てて取り組むことができる
質問 26　課題や目的（テーマ）を自分で見つけることができる
質問 27　その課題や目的（テーマ）を分析し，明らかにすることができる

同様に，上記の４つの質問項目の α 係数は 0.806 であり，４つの質問項目は十分に統合に耐え得ると判断された。

エ）　「キャリアプランニング能力」

質問 29　高校卒業までに，自分に適した進路を見つけることができたと思う
質問 30　進路を決める際に，自分で必要な情報を集めることができたと思う
質問 31　進路を決める際に，目的を持って，計画的に決めることができたと思う

同様に，上記の３つの質問項目の α 係数は 0.817 となり，３つの質問は統合できると判断された。

以上のように，質問項目を統合し，基礎的汎用的能力における４つの能力のスコアをそれぞれ作成した。

質問項目の統合の方法は，４つの能力のア）～エ）において質問項目におけるそれぞれ回答の値１（当てはまる）～４（当てはまらない）を単純に合計し，１つのスコアにする。更に見やすくするために，スコアの最小値をそれぞれ１に合わせると共に，最大値が 10 以上の場合は，10 以上の人数をまとめて表記した。数値が「１」に近づくほど，肯定的で当該の能力を育み，逆に「10」に近づくほど，否定的で当該の能力を育んでいないということを示している。調査用紙を表２に示す。

表２　アンケート調査用紙

2018 年度 ３年次生アンケート（選択）

・マークカード記入上の注意

① 年・クラス・番号を記入してください。
② 次の質問に番号で答え、その番号をマークシートに記入しなさい。

・このアンケートについて

これは成績にも評価にも関係しません。また、個人が特定できないように全体的な統計の数値として扱いますので、率直にこのアンケートに協力願います。

A　次の質問１～４に答えなさい

1　性別は何ですか。
① 男　② 女

2　あたなたは、次のどちらの入試で入学しましたか。
① 推薦入試　② 一般入試

3　進路先は次のどれですか。決まっていない人は、希望進路先を選んでください。
① 国公立大学理系　② 国公立大文系　③ 国公立短期大学　④ 私立理系
⑤ 私立文系　⑥ 私立短期大学　⑦ 専門学校（医療系除く）
⑧ 医療系専門学校　⑨ 公務員　⑩ 就職

4　あなたは、部活動や生徒会（実行委員会）等、何かに所属していましたか。
① 運動部に入っていた　② 文化部に入っていた
③ ２つ以上の部に入っていた
④ 部活動ではなく、生徒会（又は実行委員会）に入っていた
⑤ 入学後、何も入っていない　⑥ 一度入ったが、途中でやめた

B　以下の質問５～９について、どれくらい当てはまりますか？当てはまる所に○を付けて下さい。

5　学校生活は充実していた
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

6　授業に積極的に取り組んでいた
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

7　家庭での学習に積極的に取り組んでいた
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

8　家庭でも読書を積極的に行っていた
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

9　学校行事に積極的に取り組んでいた
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

10　部活（生徒会活動・実行委員会等も含む）に積極的に取り組んでいた
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

11　相手の気持ちや立場を考えて話ができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

12　自分と異なる意見でも受け止めることができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

13　自分の意見をわかりやすく説明できる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

14　人と何か作業する際に、一緒に協力することができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

15　自分は総合学科の授業で成長したと思う
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

16　自分の性格を把握できる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

17　辛いことでも我慢できる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

18　気分が乗らない時でも、しなければならない事に取り組むことができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

19　知らないことでも、自分から進んで調べることができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

20　計画を立てて取り組むことができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

21　グループワークやディスカッションで自分の意見を言うことができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

22　人前で発表することができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

23　自分が納得するまで，様々な方法を使ってとことん調べることができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

24　物事を深く考えることができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

25　進んで物事に取り組むことができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

26　課題や目的（テーマ）を自分で見つけることができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

27　その課題や目的（テーマ）を分析し、明らかにすることができる
①当てはまる　②まあ当てはまる　③あまり当てはまらない　④当てはまらない

C　進路について

28　進路を決めたのはいつ頃ですか？
①高校入学前　②１年次　③２年次　④３年次１学期　⑤３年次夏休み以降

29　卒業後の進路は、次のどれですか。決まっていない人は、希望先を選択のこと。
①就職・公務員　②専門学校（医療以外）　③医療系専門学校　④短大 ⑤大学

30　高校卒業までに、自分に適した進路を見つけることができたと思う
①当てはまる ②まあ当てはまる ③あまり当てはまらない ④当てはまらない

31　進路を決める際に、自分で必要な情報を集めることができたと思う
①当てはまる ②まあ当てはまる ③あまり当てはまらない ④当てはまらない

32　進路を決める際に、目的を持って、計画的に決めることができたと思う
①当てはまる ②まあ当てはまる ③あまり当てはまらない ④当てはまらない

33　就職希望者に尋ねます。就職先を決めた理由は何ですか。（一番当てはまる項目を１つだけ選択）
①やりがい、興味・関心　②給料等の待遇　③企業名　④親・先生等の薦め
⑤家庭の事情　⑥就職先の場所　⑦選択肢がなく、仕方なく

34　進学希望者に尋ねます。学校を決めた理由は何ですか（一番当てはまる項目を１つだけ選択）
①やりがい、興味・関心　②学力レベル　③学費等の費用　④親・先生等の推薦
⑤家庭の事情　⑥学校の場所　⑦選択肢がなく、仕方なく

D　本校での授業（①～⑨）について

［１年次］	①学習合宿　②職業新聞作成等　③テーマ別研究
［２年次］	④グッジョブ探求ディ　⑤ディベート学習　⑥プレ課題研究
［３年次］	⑦課題研究
［全年次］	⑧進路ガイダンス　⑨外部講師による授業、講演、進路別説明会

(1)　あなたの成長につながった授業は何ですか？
①～⑨から２つまで選択し、一番役立った授業を 35 に、２番目に役立った授業を 36 にそれぞれ答えなさい。全く無い場合は、35 だけに⑩をマークしなさい。

(2)　自分の進路を決める際に役立った項目は何ですか。
①～⑨から２つまで選択し、一番役立った授業を 37 に、２番目に役立った授業を 38 にそれぞれ答えなさい。全く無い場合は、37 だけに⑩をマークしなさい。

５．　調査結果の分析と考察

5.1　課題研究と基礎的汎用的能力における分析と結果

ここで，「自分の成長に繋がった授業」に関して，探求型学習で中心となる課題研究について検証した。課題研究が１番目または２番目に「自分の成長に繋がった」と回答した生徒を生徒①，「自分の成長に繋がった」授業が，１ 番目，２番目共に課題研究以外の授業を回答した生徒を生徒②として，両者を比較し，生徒①か生徒②のいずれにおいて「基礎的汎用的能力」が身に着いたかを分析した。

ただし，生徒⓪は，３年次生全体の平均の数値である。グラフの横軸は，スコアの数字である。

ア）－１　「人間関係形成・社会形成能力」（協調・協力能力）について（図 1）

質問 11，12，14 の３つの質問項目を統合させ，各質問の肯定的回答である１「当てはまる」，２「まあ当てはまる」の数値の合計は，３～６であるが，１～４に修正してある。（これ以降も同様に肯定的

回答の数値を計算する。）

肯定的回答の１～４の数値の合計を生徒①と生徒②で比較すると，それぞれ，80.7%と 88.3%となり，生徒②の方が 7.6%多い。特に１～２においては，生徒①の 23.0%に比べ，生徒②が 36.2%と顕著な差が認められる。このことから，「人間関係形成・社会形成能力」（協調・協力能力）においては，課題研究が特に有効であるという結果が得られなかった。

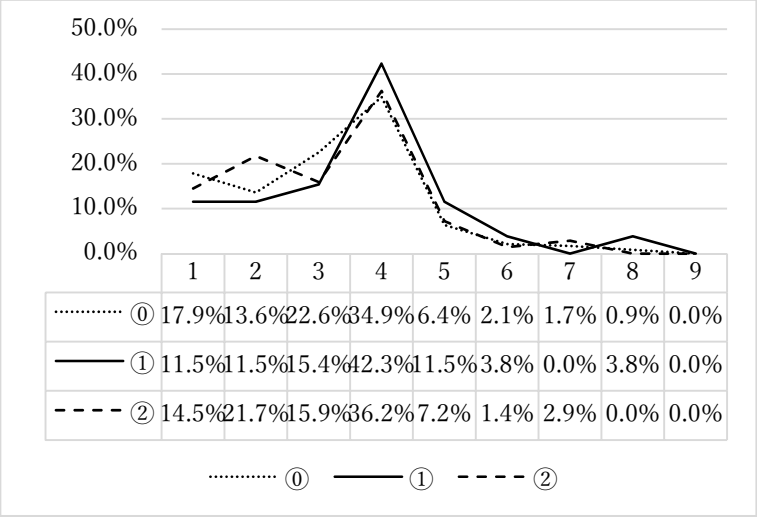

図１　人間関係形成・社会形成能力（協調・協力能力）

ア）－２「人間関係形成・社会形成能力」（積極的発信能力）について（図 2）

質問 21，22 の２項目で，肯定的回答（１～３）について，その数値の合計を生徒①と生徒②で比較すると，それぞれ 41.8%と 37.2%となり，生徒①の方が 4.6%多く，３～４において，7.5%の差が見られる。このことから，課題研究が，「人間関係形成･社会形成能力」（積極的発信能力）を育むことに，有効であるということが言える。

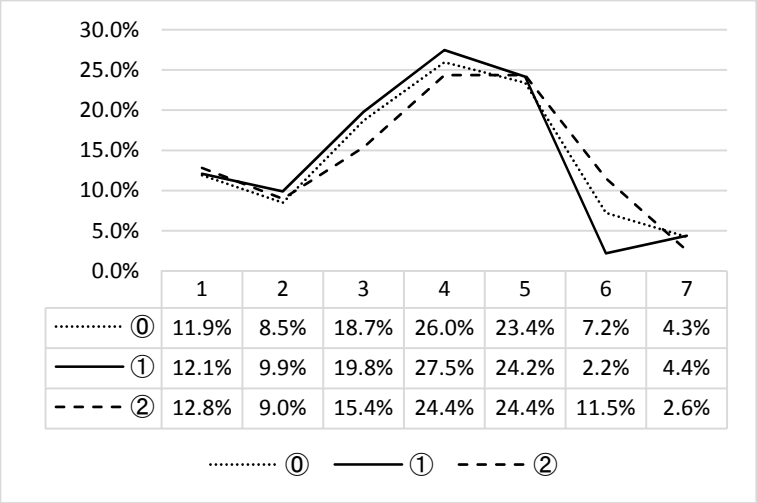

図２　人間関係形成・社会形成能力（積極的発信能力）

イ）「自己理解・自己管理能力」について（図 3）

質問 16，17，23，24，25 の５項目で，肯定的な回答（１～６）において，生徒①と生徒②を比較すると，46.1%に対して，50.6%であり，特に，２～３においては，生徒①が 0%であるに対して，生徒②が，11.6%となっている。

このことから，課題研究が，特に「自己理解・自己管理能力」を育むことに有効であるという結果が得られなかった。

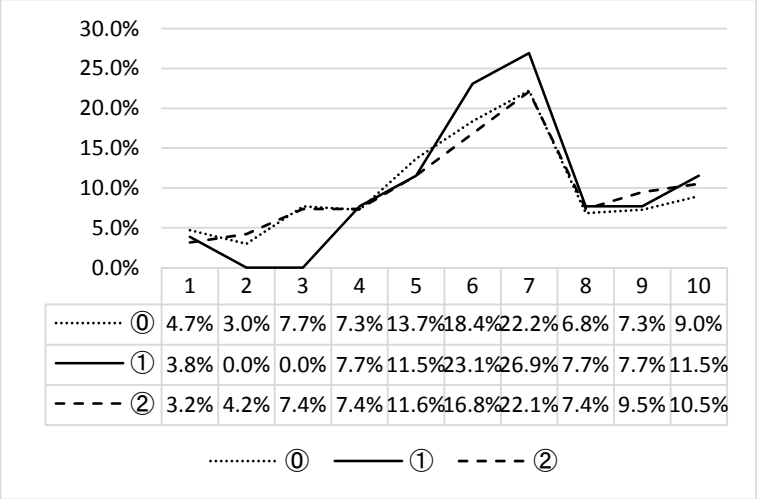

図３　自己理解・自己管理能力

ウ)「課題対応能力」について（図 4）

質問 19, 20, 26, 27 の４項目で，肯定的な回答（１～５）において，生徒①と生徒②を比較すると，38.3%に対して，33.4%である。やや肯定的である６～７は，42.3%に対して，25.0%と生徒①がかなり多く，逆に否定的な回答である８～９においては，生徒②の方が生徒①より 17.3%も高くなっている。このことから，課題研究が，「課題対応能力」を育むことに有効であるという結果が得られた。

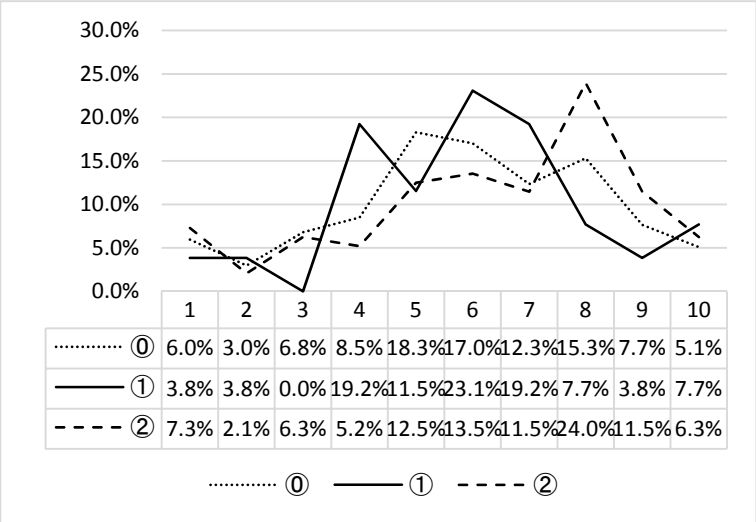

図 4　課題対応能力

エ)「キャリアプランニング能力」について（図 5）

質問 29，30，31 の３項目で，肯定的な回答（１～４）において，生徒①と生徒②を比較すると，84.6%に対して，72.8%で，11.8%の差が認められた。特に，１～２では，12.4%の差が認められる。

このことから，課題研究が，「キャリアプランニング能力」を育むことに有効であるという結果が得られた。

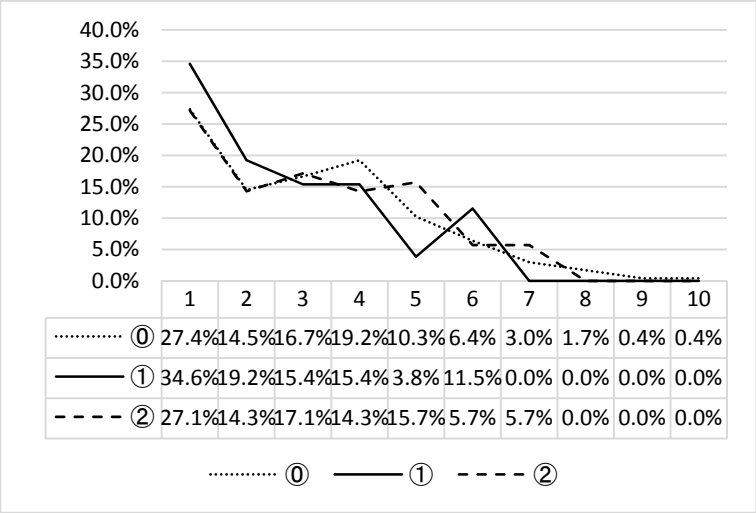

図 5　キャリアプランニング能力

5.2　考察

課題研究は，「人間関係形成・社会形成能力」（協調・協力能力），「自己理解・自己管理能力」を育むことに対しては，有効とは言えないが，「人間関係形成・社会形成能力」（積極的発信能力），「課題対応能力」，「キャリアプランニング能力」を育むことに対しては有効であることが明らかになった。

これは，課題研究が定められた期間内に自ら課題を見つけ，一人で調査研究し，それらを文章にまとめ，パワーポイントを活用して発表するといったスケジュール管理も必要な課題解決・発信型の活動であり，グループで協力したり，協議したり，意見の調整を行う等のコミュニケーション活動が少ないからだと推察できる。逆に，「人間関係形成・社会形成能力」（協調・協力能力），「自己理解・自己管理能力」を育むためには，コミュニケーション活動が多く含まれる班別協議やディベート学習等は有効であると推察できるが，更に検証が必要である。

６． 卒業生へのインタビュー調査

6.1 目的

ここでは，次のことを検証する目的で２つ目の調査であるインタビュー調査を行った。

・総合学科での探求型学習が，卒業後就職した職場や大学において，どのような影響を与えているのか。

6.2 対象者

本研究では，総合学科での学びが「基礎的汎用的能力」を育み，職場での仕事及び大学での学業に影響を与えていると仮定し，多様なケースが調査対象となるように性別，卒業後の進路を考慮し，また年齢は，高校時代の記憶が比較的新しく，かつ仕事や学業をある程度経験し他の影響要因が少ない卒業後３～５年経過した２１歳～２３歳のＡ高校の卒業生を対象とした。具体的には，次の表３の通りである。研究倫理の観点から研究の目的，得られた情報は研究以外に使用しないこと，結果を公表する場合は個人を特定できないように配慮することを事前に説明し，本人の承諾を得て実施した。

表３　調査対象者一覧

氏名	卒業後の進路	現在の職業，学校名（学部・学科）
A	就　職	公務員
B		地元企業（機械加工・技術職）
C	専門学校 → 就職	整備士（専門学校卒業後，就職）
D		整備士（専門学校卒業後，就職）
E	大　学	難関私立大学（文系）
F		国立大学（理系）
G		難関私立大学（理系）
H		公立大学（理系）
I		私立大学（文系）
J		私立大学（文系）

6.3 データ収集

調査対象者には，応接室等において正対して着席した状態で１人ずつ行い，部屋には調査者と調査対象者１名のほか入室者はいない状態であった。対象者には，半構造化インタビュー形式で行った。質問項目対して，自由に答えてもらうことで量的分析では得られない情報が引き出すことができるからである。インタビュー内容は，本人の了解のもと，ボイスレコーダーで記録を行い調査後に逐語録を作成した。個人情報が入っていたため，本研究では記載内容に配慮している。

本研究では，「卒業後 A 高校での探求型学習が仕事や学業に活かされているのか」，また，「活かされるとすれば，どのような授業や取組が，仕事や学業のどういう点に役立っているのか」について，詳しく語ってもらった。

７． インタビュー調査結果と分析

10 名の総合学科高校卒業生のインタビュー調査結果から基礎的汎用的能力である４つの能力別に探求型学習の仕事や学業への影響要因を分析した。

ア）　「人間関係形成・社会形成能力」

公務員の A さんは，「会議等で意見を述べる時，メリット，デメリットを考えるようになった」と述べているが，これはディベート学習で反対の立場に立って考える活動により積極的発信能力の育成

に繋がっていると言える。また,「産業社会と人間」の授業での KJ 法を活用したグループ協議や班別協議を行った時,「グループで議論する時は，相手を批判することは厳禁，質より量のルールを言われたが，今の職場での会議でもそれが生きている。」と述べており，まだ就職して４年目であるが，探求型学習が職場での会議で活かされていることがわかる。

技術職である B さんは，非常に向上心が旺盛で，現在資格試験の勉強をしており，さらにリーダー育成研修も受講している。高校ではコミュニケーション能力を高めることができたと述べ，また「会社ではパワーポイントを使って発表する機会があるので，高校時代にパワーポイントを活用していたのは役立った。大手企業なら，技術者であっても文章力が必要だと思う」と述べ，発表する力や人の前に立つリーダーとしての資質が探求型学習により育まれていることがわかる。

整備士である C さんは，職場でも意見を積極的に発言しており,「職場で，人と会話する時，自分の意見が言えるので，総合学科で学んだことは役に立っている」と述べている通り，他の同年代の同僚に比べ，意見をしっかり言うことができている。

E さんは，課題研究により「大学でのレポートを書く際に書き慣れていることと論文の書き方，文章構成，レイアウト等で役立っている。」また，ディベート学習では,「自分の意見と反対の立場で考えなければならない時もあり，大変だったが，今レポートを書くときに役立っている。レポートを書く時，ある意見の反対の立場に立って考える」と述べ，自分の意見とその反対の立場の意見とを比較し，客観的に考えることができる力が培われ，また，その姿勢が身についていることがわかる。また,「グループ討議では，話始めの時，皆言葉が出てこないが，私の場合,『○○さん，どうぞ』等と人に割り振っていくことができる」ことから，リーダーとしての素養も身に付けていると考える。

これらのことから，総合学科での産業社会と人間，課題研究，ディベート学習等の探求型学習が，自分の意見と他人の意見を比較し客観的に他人の個性や考えを理解したり，意見の異なる人とも協働し，リーダーシップを発揮し活動に参加できる力を育んでいることがわかった。

イ）　「自己理解・自己管理能力」

C さんは，職場での検定試験を受けるために，２カ月に１回の講習に参加し，検定に向けて粘り強く取り組んでいる。「冊子や実習のプリント等があり，課題を出され，それをクリアしていく」と述べているように，自分のすべきことを深く理解し，それを継続的に行動に繋げている。

同じく整備士の D さんは，総合学科の取組で課題研究が一番役に立っていると言い，課題のテーマを「環境に良い車」とし，深く掘り下げたので，その時の調査研究行ったことが今の仕事に役立っているようであり,自分の立場や役割をよく理解し,より仕事への意欲を持って取り組んでいるようだ。

G さんは,「大学で英語の論文を読む必要があるが，高校で課題研究を経験したので，苦にせず前向きにとらえることができた」と課題研究の取り組みを肯定的に回答した。

J さんは，大学での課題作成を忍耐強く乗り越えている。「課題研究が役立っている」と述べているように 6000 字の課題研究を完成したことで身についたものだと考えられる。

これらのことから,探求型学習が,自分の設定した目標や課題に対して,主体的に行動すると共に,自らの思考や感情を律し，主体的に積極的に取組む姿勢が身についたと考えられる。

ウ）　「課題対応能力」

B さんは，高校では工業の専門的な勉強は全くしてこなかった。職場では周りの同年代の同僚が全員工業科出身であるにもかかわらず，自己の能力をよく把握，管理し，積極的に資格取得する姿勢や

リーダー育成講座を受講する等，リーダーとしての資質が職場で認められている。

C さんは，専門学校時代での専門的な課題に対して，「文章をまとめることが多かったので，課題研究が役に立った。具体的には，実習内容をよく理解するために，細かくメモを取ったり，機械の構造を理解するために絵を書いたりして，レポートにまとめることをしていた」という発言から，課題に対して，自分で課題を咀嚼し，自ら課題解決の道筋を取る姿勢が身についていると考えられる。

D さんは，課題研究が，「文章を書くこと，言葉遣い，文章力等に役立っている」と述べているように，文章を書く力という基礎的な力が役立っているようである。

E さんは，「レポートを書く時，ある意見の反対の立場に立って考えることができる」姿勢が身についているので，ある課題に対して客観的に分析できる力が培われていると考えられる。

H さんは，「公立大学の推薦入試で合格が決まってから自分で数学等の足りない分を自分で勉強した」と述べているように，推薦入試で早く進路が決まり，大学入学後を見据えて，卒業までの期間を有効に活用し，入学後の普通科卒業生との学力差のハンディを克服している。

I と J さんは，大学全体のプレゼンテーションコンテストで上位を獲得していることから，課題を発見・分析，処理する力が高く，発表におけるコミュニケーション能力が身についていることが明らかとなった。

これらのことから仕事や学業において，自ら課題を発見しその課題に対して何とかして取り組んで行く姿勢が見られ，また，ある一定の成果を上げており探求型学習の効果がここでも認められる。

エ）　「キャリアプランニング能力」

B さんは，他の同僚と異なり，高校では専門知識・技能を学んでこなかったが，「現在，仕事上の資格取得の勉強をしており，リーダー養成の講座を受講中である」と述べているように，将来を見据え，より幅の広い専門性・技術を身に付け，リーダーとして自分がどうあるべきかをよく理解し行動している。またその立場において，更に電卓やパソコンの技能の習得が有効であることも理解している。

C，D さんは，講習会を受講し，職場の検定試験を受験する等，自分の将来を見据えて，次のステップに備えている。検定を受験しない同年代の同僚もいるとのことなので，計画的に自分のキャリアをプランニングしていると言える。

運動の得意な E さんは，進路を決める時だけでなく平常から自分の意思で選択肢が広がる方向で考えている。例えば，高校３年次で大学の学部を選ぶ際に「体育免許は後でも取得できると考え，社会科の免許取得できる大学・学部を選択した」というように自分のキャリアを戦略的に考えて選択している。在校生へのアドバイスにおいても，「自分は多くのことに興味を持ち，色々調べたりしていた。進路の選択肢が増えるので，多くのことに興味を持つことが大切だと思う」と述べ，キャリアプランニングを行うことの重要性を伝えている。

H さんは，大学へ入学するまでに普通科卒業生との学力差のハンディを克服するといった強い意志を持ってキャリアプランニングを行い，自主的計画的に卒業までの期間を効果的に活用していた。

D，I，J 以外の７名の卒業生は，中学校時代には特に進路について深く考えていなくて，高校入学後，職業観・勤労観を身に付け，高校３年で自分の進むべき道を見つけてそれに対して努力する姿勢がみられる。

これらのことから，自分の立場や自分の考えを踏まえ，「働くこと」に対して，自分の適性を主体的に判断し，計画性を持ってキャリアを形成していることが，明らかになった。

８． 卒業生へのインタビュー調査の考察

卒業生へのインタビュー調査から課題研究等の探求型学習において，総合学科Ａ高校の生徒に４つの「人間関係形成・社会形成能力」，「自己理解・自己管理能力」，「課題対応能力」，「キャリアプランニング能力」が培われていることが明らかになった。特に「人間関係形成・社会形成能力」については，今後リーダーとして活躍していくには必要不可欠な能力だと言える。

本調査の中で，高校時代のいわゆる偏差値が特に高いとは言えなかった生徒が，卒業後，職場でリーダー候補として頼りにされ，一番若い立場であっても会議で発言することができていたり，学業では大学においてコミュニケーション能力が育まれていること等が明らかになったことは，探求型学習の意義は大きいと考える。

９． まとめ

本研究では，３年次生への質問紙調査及び卒業生へのインタビュー調査をもとに，探求型学習が基礎的汎用的能力の育成に繋がっているかどうかを探ってきた。

その結果，課題研究が基礎的汎用的能力の育成に繋がっていることが２つの調査から示された。そして卒業後もその基礎的汎用的能力が活かされていることから，課題研究を中心とする探求型学習の意義や効果は認められ，今後このことが普通科改革へのヒントになると考えられる。ただ，課題研究だけでは，「基礎的汎用的能力」の一部の能力育成には有効と認められなかったことも留意し，それを補う学習活動を取り入れる必要があろう。

普通科改革において，本田（2009）は，普通科の課題として「望ましい『勤労観・職業観』や『汎用的・基礎的能力』の方向性を掲げながらも，それを実現する手段を具体的に提供していない」(5)としているが，総合学科Ａ高校では，具体的な手段を講じており，普通科の課題を克服していると言える。

新学習指導要領では，「総合的な学習の時間」が「総合的な探求の時間」となり，総合学科において課題研究において培ってきた探究活動の重要性や必要性が認められ，普通科改革へ繋がると考える。多忙を極める学校現場において，限られた時間と資源（人材）の中で，今後探求型学習をどのように取り入れ，どのように実践していくかが課題となろう。

注・引用文献

(1) 「高等学校教育の改革の推進について(第四次報告)-総合学科について(報告)-」（1993）において，学科の原則履修科目として，「産業社会と人間」，「情報に関する基礎的科目」及び「課題研究」を開設することが適切である，と記されている。

(2) 中央教育審議会　「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011）pp.58-59,

(3) 中央教育審議会　「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011）pp.25-27

(4) 総合学科の在り方に関する調査研究(2012)　「高等学校教育改革の推進に関する調査研究事業」
調査研究機関：東京女子体育大学，研究代表者：服部 次郎　東京女子体育大学報告書概要 pp.70-71
ここで，「総合学科では、教科・科目の授業のように、教師が主導して授業を進めるのではなく、生徒一人ひとりがテーマを設定し、そのテーマを追求するために、毎時の学習計画をたてて、調査・実験・観察・製作・調べ学習、まとめ、報告書作成、発表会・報告会等の学習を展開している。この探求活動は、自分の時間割で学んだ学習の集大成を行うとともに、次のステップ（職場・上級学校）へ進むための動機付けや目的を明らかにする大切な学習活動でもある。」と課題研究の意義が述べられている。

(5) 本田由紀(2009)『教育の職業的意義－若者，学校，社会をつなぐ』ちくま新書，pp.111-112